

〈書評論文・書評〉[書評論文]

## 指示詞研究の新展開 ——空間指示詞の類型論——

Levinson, Stephen C., Sarah Cutfield, Michael J. Dunn,  
N. J. Enfield, and Sérgio Meira (eds.) *Demonstratives in  
Cross-Linguistic Perspective*

Cambridge: Cambridge University Press, 2018, xv + 387p.,  
ISBN-13: 978-1108424288

澤 田 淳  
青山学院大学

### 1. はじめに

自然言語の中において、指示詞は最も基本的な語彙の 1 つであるにも関わらず、その意味や運用の正確な記述は容易ではない。また、言語間において体系や意味・運用の差異も大きい表現でもある。Senft (2014: 48) ([石崎・野呂 (訳) (2017: 67)]) は「話し手が空間を直示的に参照する方法は多様であるが、それらの中で最も言語学者の関心を引き付けたものが指示詞である」と述べている。複雑かつ興味深い振る舞いをなし、言語多様性にも富む指示詞は、語用論において魅力ある研究対象の 1 つである。

本書は、マックス・プランク心理言語学研究所による空間指示詞（指示詞の現場指示用法（＝直示用法／外界照応用法））の類型論的研究の共同成果物である。構成は以下の通りである（言語の系統と調査地も挙げておく（13 頁参照））。

第 1 章：Introduction: Demonstratives: Patterns in Diversity (Stephen C. Levinson)

第 2 章：The Demonstrative Questionnaire: “THIS” and “THAT” in Comparative Perspective (David P. Wilkins)

第 3 章：Lao Demonstrative Determiners *Nii*<sup>4</sup> and *Nan*<sup>4</sup>: An Intensionally Discrete Distinction for Extensionally Analogue Space (N. J. Enfield)（調査言語：ラオ語（タイ・カダイ語族）、調査地：ラオス）

第 4 章：Dalabon Exophoric Uses of Demonstratives (Sarah Cutfield)（調査言語：ダラボン語（ゲンウィングアン語群）、調査地：オーストラリア（アーネムランド））

- 第 5 章 : Brazilian Portuguese: Non-contrastive Exophoric Use of Demonstratives in the Spoken Language(Sérgio Meira and Raquel Guirardello-Damian) (調査言語: ブラジル・ポルトガル語 (インドヨーロッパ語族)、調査地: ブラジル)
- 第 6 章 : “See This Sitting One”: Demonstratives and Deictic Classifiers in Goemai (Birgit Hellwig) (調査言語: ゲマイ語 (アフロアジア語族)、調査地: ナイジェリア)
- 第 7 章 : Tzeltal: The Demonstrative System(Penelope Brown and Stephen C. Levinson) (調査言語: ツェルタル語 (マヤ語族)、調査地: メキシコ)
- 第 8 章 : Yucatec Demonstratives in Interaction: Spontaneous versus Elicited Data (Jürgen Bohnemeyer) (調査言語: ユカテク語 (マヤ語族)、調査地: メキシコ)
- 第 9 章 : Lavukaleve: Exophoric Usage of Demonstratives(Angela Terrill) (調査言語: ラヴカレヴェ語 (孤立語)、調査地: ソロモン諸島)
- 第 10 章 : Tiriyó: Non-contrastive Exophoric Uses of Demonstratives(Sérgio Meira) (調査言語: ティリヨ語 (カリブ語族)、調査地: ブラジル、スリナム)
- 第 11 章 : Trumai: Non-contrastive Exophoric Uses of Demonstratives(Raquel Guirardello-Damian) (調査言語: ツルマイ語 (孤立語)、調査地: ブラジル (シンガー))
- 第 12 章 : Saliba-Logea: Exophoric Demonstratives(Anna Margetts) (調査言語: サリバーロゲア語 (オーストロネシア語族)、調査地: パプアニューギニア)
- 第 13 章 : Warao Demonstratives(Stefanie Herrmann) (調査言語: ワラオ語 (孤立語)、調査地: ベネズエラ、ガイアナ)
- 第 14 章 : Chukchi: Non-contrastive Spatial Demonstrative Usage(Michael J. Dunn) (調査言語: チュクチ語 (チュクチ-カムチャッカ語群)、調査地: ロシア (シベリア))
- 第 15 章 : Yélî Dnye: Demonstratives in the Language of Rossel Island, Papua New Guinea(Stephen C. Levinson) (調査言語: イェリ・ダニエ語 (孤立語)、調査地: パプアニューギニア)
- 第 16 章 : Tidore: Non-contrastive Demonstratives(Miriam Van Staden) (調査言語: テイドレ語 (北ハルマヘラ諸語)、調査地: インドネシア (ティドレ島))
- 第 17 章 : The Jahai Multi-term Demonstrative System: What’s Spatial about It? (Nielas Burenhult) (調査言語: ジャハイ語 (オーストロアジア語族)、調査地: マレーシア)

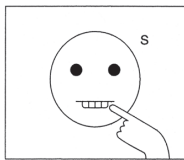
空間指示詞の類型論的研究は既に一定程度の蓄積があり、世界の諸言語の指示詞を見渡した場合、空間指示詞が、距離、アンカー (参照点)、可視性、可聴性、対象の高さや体

勢、動きの方向性、地形など、種々のパラメータに応じた多様な意味・機能を含み得る点が明らかになってきているが (Fillmore (1982)、Anderson and Keenan (1985)、Diesel (1999、2013)、Dixon (2003)、Imai (2009)、Senft (2014) など)、本書は、共通のエリシテーション・ツール (elicitation tool) を用いた空間指示詞の類型論的研究である点に特色がある。具体的には、David P. Wilkins によって開発された「指示詞調査票」(demonstrative questionnaire) (Wilkins 1999) (第2章に再録) を共通のエリシテーション・ツールとして、15の言語の空間指示詞について詳細な調査・分析が行われている。

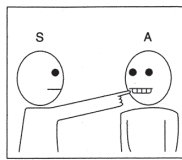
本稿では全ての章を紹介することはできないが、本書の理論的支柱となっている第1章、第2章、第3章、第15章を中心に提起、本書の意義と課題について論じる。

## 2. エリシテーション・ツール (指示詞調査票)

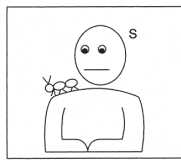
はじめに、本書で使用されているエリシテーション・ツール (指示詞調査票) の内容を概観しておこう。調査者は、以下の25の場面に描かれている状況と同じかそれに近い状況を再現し (つまり、下記の図をコンサルタントに直接見せるわけではない)、その実際の状況において、コンサルタントがどのような指示詞を使用・選択するのかを調査している (S=話し手、A=聞き手 (以下、同様))。



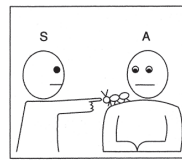
【場面1】



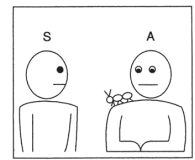
【場面2】



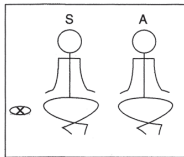
【場面3】



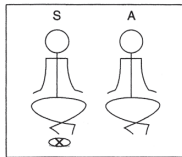
【場面4】



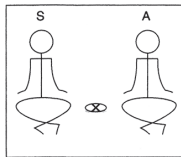
【場面5】



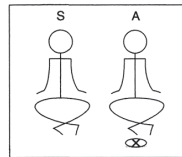
【場面6】



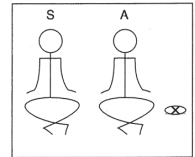
【場面7】



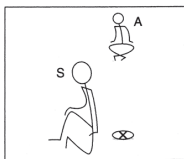
【場面8】



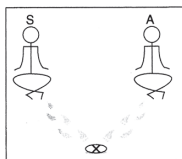
【場面9】



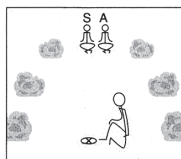
【場面10】



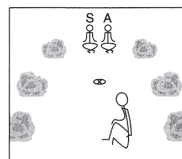
【場面11】



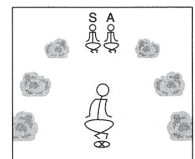
【場面12】



【場面13】



【場面14】



【場面15】

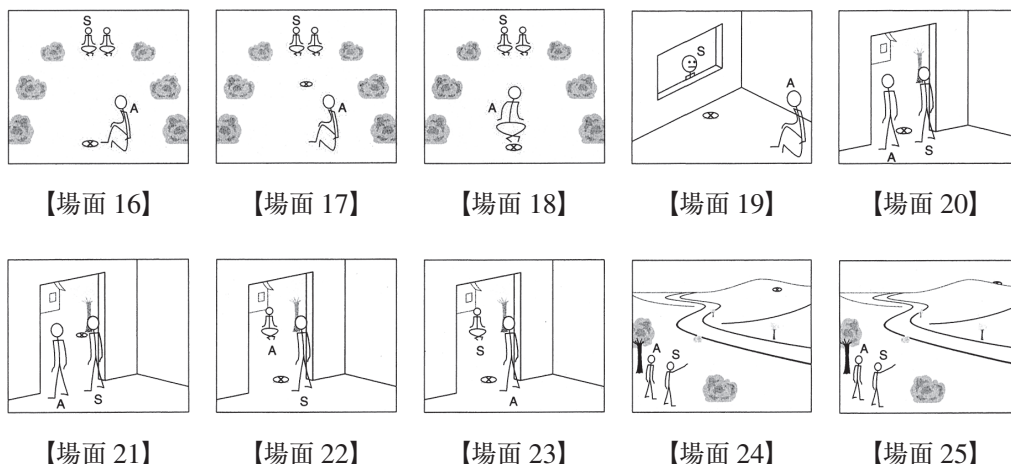


図 1 25 の指示場面 (Wilkins 論文 (第 2 章)、45-52 頁)

【場面 1】から【場面 25】は具体的には次のような場面である (Wilkins 論文 (第 2 章))。

- 【場面 1】： 話し手が自身の歯を指で指し示す。
- 【場面 2】： 話し手が聞き手の歯を指で指し示す。
- 【場面 3】： 話し手が自身の肩にくっついている虫を指さしを伴わずに指示する。
- 【場面 4】： 話し手が聞き手の肩にくっついている虫を指で指し示す。
- 【場面 5】： 話し手が聞き手の肩にくっついている虫を、指さしを伴わずに指示する。
- 【場面 6】： 指示対象は話し手の手の届く位置にあり、聞き手からは離れた側の位置にある。指示対象は聞き手からは見えなくはないが、見えづらい位置にある。
- 【場面 7】： 指示対象は話し手の前にあり、聞き手からも見える位置にある。ただし、聞き手からは手の届かない位置にある。
- 【場面 8】： 指示対象は話し手と聞き手の真ん中にあり、両者から手の届く位置にある。
- 【場面 9】： 指示対象は聞き手の前にあり、話し手からも見える位置にある。ただし、話し手からは手の届かない位置にある。
- 【場面 10】： 指示対象は聞き手から手の届く位置にあり、話し手からは離れた側の位置にある。指示対象は話し手からは見えなくはないが、見えづらい位置にある。話し手は指示対象の置かれている位置を知っている。
- 【場面 11】： 指示対象は話し手の背後にある。指示対象は聞き手からはいくらか離れた位置にある。聞き手には容易に見える位置にあるが、聞き手からは手の届かない位置にある。指示対象は話し手からは見えないが、話し手はその存在を認識している。話し手は (振り返って) 指示対象を見



ていない。

- 【場面 12】： 指示対象は話し手と聞き手から等距離の前方にあり、かつ、両者の中間の位置にある。指示対象は両者からは容易に見える位置にあり、5 歩程度歩けば手に取れる位置にある。
- 【場面 13】： 話し手と聞き手は、広い見晴らしのいい空間の端の側に隣り合って座っている。空間の広さはフットボール場ほどあり、その空間のもう一方の端の側に人が座っており、その人の前に指示対象が置かれている。話し手と聞き手からはその指示対象が見える。
- 【場面 14】： 話し手と聞き手は、広い見晴らしのいい空間の端の側に隣り合って座っている。空間の広さはフットボール場ほどあり、その空間のもう一方の端の側に人が座っている。指示対象は話し手・聞き手とその人のちょうど真ん中の等距離の位置にある。
- 【場面 15】： 話し手と聞き手は広い見晴らしのいい空間の端の側に隣り合って座っている。空間の広さはフットボール場ほどあり、その空間のもう一方の端の側に人がいる。その人は話し手と聞き手に背を向けて座っており、その人の前には指示対象がある。指示対象は話し手・聞き手からは見えないが、話し手はその指示対象の存在とその位置を認識している。
- 【場面 16】： 話し手は広い見晴らしのいい空間の端の側に座っている。空間の広さはフットボール場ほどあり、空間のもう一方の端の側に聞き手が座っている。指示対象は聞き手の目の前にあり、話し手からも見える位置にある。
- 【場面 17】： 話し手は広い見晴らしのいい空間の端の側に座っている。空間の広さはフットボール場ほどあり、空間のもう一方の端の側に聞き手が座っている。指示対象はその空間の真ん中にあり、話し手と聞き手から等距離の位置にある。
- 【場面 18】： 話し手は、広い見晴らしのいい空間の端の側に座っている。空間の広さはフットボール場ほどあり、その空間のもう一方の端の側に聞き手が座っている。聞き手は話し手から背を向けており、聞き手の目の前には指示対象がある。指示対象は話し手からは見えないが、話し手はその指示対象の存在とその位置を認識している。
- 【場面 19】： 話し手は家の外に立っており、窓越しから部屋の中を覗いている。聞き手は窓から離れた部屋の端の側にいる。指示対象は窓の近くにあり、話し手からも聞き手からも見える。指示対象は、物理的には聞き手よりも話し手に近い位置にある。

- 【場面 20】：話し手と聞き手は家の中におり、開いたドアから外を見ている。二人はドアの近くにいる。指示対象はドアのすぐ外（ドアの近く）にあり、話し手と聞き手から容易に手の届く位置にある。また、指示対象は、話し手と聞き手から等距離の位置にある。
- 【場面 21】：話し手と聞き手は家の中におり、開いたドアから外を見ている。二人はドアの近くにいる。指示対象は両者から数メートル離れた、木の傍にある。指示対象は話し手寄りにあり、かつ、話し手の直線上の方向にある。
- 【場面 22】：話し手は家の中におり、開いたドアから外を見ている。聞き手が話し手から数メートル離れた屋外で座っている。指示対象はドアのすぐ外にあり、物理的に話し手の近くにある。
- 【場面 23】：聞き手は家の中におり、開いたドアから外を見ている。話し手が聞き手から数メートル離れた屋外で座っている。指示対象はドアのすぐ外にあり、物理的に聞き手の近くにある。
- 【場面 24】：広大な地理空間において、話し手と聞き手が隣り合って、川向うの数キロ離れた遠くの丘陵を眺めている。話し手は、両者から見える丘陵の上方にある対象物を指さしている。
- 【場面 25】：広大な地理空間において、話し手と聞き手が隣り合って、川向うの数キロ離れた遠くの丘陵を眺めている。話し手は、両者から見えない丘陵の向こう側にある対象物を指さしている。

これらの場面設定にあたっては、(i) 指示対象を同定する際の参照点となる「アンカー」の種類（話し手アンカー、聞き手アンカー、話し手・聞き手アンカーなど）、<sup>1</sup> (ii) 指示対象の「可視性」、(iii) 話し手（聞き手）から指示対象までの「距離」、(iv) 指さしなどの「ジェスチャー」を伴う指示か否か、(v) 指示対象に対する「聞き手の注意」、などのファクターが考慮に入れている。以下では、(iv)、(v) のファクターについてやや詳しく見てみることにする。

はじめに、「指さしなどのジェスチャーを伴う指示か否か」という点を見てみよう。これまでの指示詞研究では、「指さしなどのジェスチャーを伴う指示か否か」という観点が指示形式の選択に影響を与えるファクターとして論じられることはあまりなかったと言える。しかし、Wilkins は、言語によっては「指さしなどのジェスチャーを伴う指示か否か」が指示詞の選択に影響を与え得る点を指摘している。次のオランダ語の指示詞の例を見てみよう（deze：近称、die：遠称）。

<sup>1</sup> 日本語で言えば、たとえば、聞き手領域指示用法のソ系は「聞き手アンカー」である。

- (1) Vind je dat {deze/die} schoenen bij het jasje passen?

‘Do you think that {these/those} shoes go with the jacket?’

(Kirsner 1993: 98、Wilkins 論文 (第2章)、69頁)

Wilkinsによれば、近称 *deze* の例の場合、話し手は指さしを伴わずに、単に自分が履いている靴を見下ろしたり、片方の足を少し上げて靴を見ているのに対して、遠称 *die* の例の場合、話し手は自分の履いている靴を指さしているという (Wilkins 論文 (第2章)、69頁)。

私見では、ここでの近称 *deze* と遠称 *die* の選択には、「視点」の違いも反映されているように思われる。(1) では、指さしを伴わない近称 *deze* の場合、話し手の視点から靴が指示されており、指さしを伴う遠称 *die* の場合、聞き手の視点から (ないしは、聞き手の視点を意識した形で) 靴が指示されていると考えられる。

英語でも、次の *that* は、聞き手視点を反映している (Fillmore 1997、澤田 2013)。

- (2) (患者が痛む歯を自分で指さし、医者にそれを伝える場面)

It's that one.

(Fillmore 1997: 123)

話し手が近くにある対象を、自身の視点からではなく、わざわざ聞き手の視点から指示する背景には、話し手が聞き手の注意を指示対象に向かわせる (指示対象へと聞き手の注意を強く引く) 意図があると考えられる (ここで関与する「聞き手の注意」は下記 (4) の (ii) のケースに該当すると言える) (澤田 2013: 18)。聞き手視点を反映する *that* は、指さしなどのジェスチャーを伴って現れるという特徴がある (すなわち、「ジェスチャー用法」 (gestural use) (Fillmore 1997: 63) を基盤とする指示である) が (Fillmore 1982: 46、澤田 2016: 70)、これは、指さしなどのジェスチャーを伴うことで、聞き手の注意を指示対象に向かわせるという話し手の意図がより達成しやすくなるからであると考えられる。

(2) は図1の【場面1】と似た場面である。Levinson 論文 (第1章) では、2項体系の指示詞を持つ言語として、英語、オランダ語、イタリア語、ロシア語、ブラジル・ポルトガル語、ラオ語、ゲマイ語、ユカテク語が取り上げられているが、このうち、英語とオランダ語が【場面1】で遠称の指示詞の使用が許容されるという (21-22頁)。

次に、「指示対象に対する聞き手の注意」を見てみよう。Diessel (2006: 469) は、指示詞は、「直立的中心点と関係づけて指示対象の位置を指し示す機能」と「聞き手の共同注意的な焦点を調節する機能」という (相互に関連した) 2つの機能を有するとする。

「聞き手の注意」は、後者の指示詞の機能と深く関わるファクターであり、トルコ語指示詞の研究 (Özyürek (1998)、Küntay and Özyürek (2006) など) を契機として、空間指示詞の選択の一要因として注目されるようになった概念である (Burenhult (2003)、Levinson (2004)、平田 (2014)、澤田 (2016) など参照)。Burenhult 論文 (第17章) では、

ジャハイ語の空間指示詞の観察を基に、「聞き手の注意」が、少なくとも、(i) 話し手が聞き手の注意を指示対象に向かわせる「注意誘導型」(attention-drawing)、(ii) 話し手が聞き手の注意を別の指示対象へと向かわせるように修正(シフト)させる「注意修正型」(attention-corrector)、(iii) 話し手が聞き手の注意が既に指示対象に向けられていることを確認している「注意確認型」(attention-confirming) の3つに分類できることを論じている(ジャハイ語では、「聞き手の注意」の3区別が、指示形式の選択に反映されるとされる(368頁参照))。

Burenhult による「聞き手の注意」の3分類は示唆に富む分類であるが、さらに幾つかの観点を加えることができるように思われる。

まず、「注意誘導型」と「注意修正型」は、話し手が聞き手の注意を指示対象に向かわせる機能を有する点では特徴を共有しており、両者は「話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象にまだ向けられていないケース」の下位類として関係づけることが可能である(なお、Levinson 論文(第1章、29頁)では、「注意修正型」は「注意誘導型」のサブタイプと位置づけている)。

これとは逆に、「話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象に既に向けられているケース」も設定することができる。このケースには、話し手が聞き手の注意が既に指示対象に向けられていることを確認(認識)しているだけの(すなわち、話し手は指示対象に注意を向けていない)タイプと、聞き手が既に注意を向けている対象に話し手も注意を向けるタイプとに下位区分が可能である。Burenhult のいう「注意確認型」はこの両タイプを包含している可能性もあるが、本稿では、前者のタイプに対してのみ「注意確認型」という名称を当て、後者のタイプを「注意追随型」と仮称しておきたい。「注意確認型」と「注意追随型」の区別を想定しておくことで説明がしやすくなる事例として、次の韓国語の例を見てみよう(澤田(2016: 68)も参照)(韓国語の指示詞は三項体系であり、「그」(ku)は中称(第三)の指示形式である)(ローマ字表記はYale式による)。

- (3) (話し手の家のリビングの壁に一枚の絵が飾られている。話し手の家のリビングに通された聞き手が、絵から4メートルほど離れたところにあるソファに腰掛けてその絵を見ている。話し手が聞き手に話しかける)

그 그림은 죽은 남편의 유품 이에요.

ku kulim-un cwukun namphyen-uy yuphwum ieyyo.

その 絵-は 亡くなった 主人-の 形見 です

「その絵は、亡くなった主人の形見なんです」

韓国語のコンサルタントによると、この例では、話し手が、聞き手が絵を見ていることを確認し、自身は絵を見ずに話している「注意確認型」の状況(たとえば、話し手はその絵を見ずに、聞き手の隣に座ってお茶をつぎながら話している状況)では、「그」(ku)の

使用は自然であるが、話し手も絵を見ながら話したり、絵を指さしながら話したりしている「注意追随型」の状況では「ㄱ」(ku)の使用は不自然に感じられる(後者の状況の場合、遠称の「저」(ce)の使用が自然である)という。日本語では、いずれの状況でもソ系の使用が全く自然となるのと対照的である。個人差・方言差などを考慮に入れたさらなる調査が必要ではあるが、韓国語の「ㄱ」(ku)の使用が「注意確認型」と「注意追随型」の区別にセンシティブであるのは間違いないと言える。

Burenhult 論文(第 17 章)の分類を基に、さらに上記 2 点の観点を反映させるならば、「聞き手の注意」は、少なくとも次のタイプに下位分類される。<sup>2</sup>

(4) 「聞き手の注意」の下位分類

- (i) 話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象に既に向けられているケース：
  - (a) 話し手が聞き手の注意が既に指示対象に向けられていることのみを確認(認識)している(すなわち、話し手は指示対象に注意を向けていない)「注意確認型」
  - (b) 聞き手が既に注意を向けている対象に話し手も注意を向けている「注意追随型」
- (ii) 話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象にまだ向けられていないケース：
  - (a) 話し手が聞き手の注意を指示対象に向かわせる「注意誘導型」
  - (b) 話し手が聞き手の注意を別の指示対象へと向かわせるように修正(シフト)させる「注意修正型」

次の図 2 の【場面 11】では、話し手は自身の背後に置かれている指示対象に注意を向けていない(指示対象を見ていない)が、聞き手の注意が指示対象に向けられていることを確認(認識)している「注意確認型」が関与する場面である。

<sup>2</sup> トルコ語指示詞は、三系列の体系(bu/şu/o)をなすが、Küntay and Özyürek (2006: 307)によれば、一般に、bu/o は「話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象に既に向けられている場合(または、聞き手の注意が指示対象に向けられているかどうかにおいて中立的な場合)」に使われ(この場合、bu は話し手から近い対象を、o は話し手から遠い対象を指す)、şu は「話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象にまだ向けられていない場合」に使われるとされる。

また、本書 Meira 論文(第 10 章、236 頁)によれば、ティリヨ語の近称の無生物指示の形式(proximal inanimate terms)には、serë と se (nĩ) の 2 つの形式があり、serë は「話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象に既に向けられている場合」に使われ、se (nĩ) は「話し手による指示がなされる以前に、聞き手の注意が指示対象にまだ向けられていない場合」に使われるとされる。



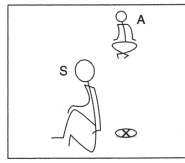


図 2 【場面 11】(Wilkins 論文 (第 2 章)、48 頁)

【場面 11】の場合、英語では、「近称」this が選好されるものの、「遠称」that の使用も可能であるとされる (Wilkins 論文 (第 2 章)、56 頁)。一方、同じ 2 項体系の指示詞を持つラオ語では、「遠称」nan<sup>4</sup> の使用は不可能であり、「近称」nii<sup>4</sup> のみが使用されるとされる (nii<sup>4</sup> と nan<sup>4</sup> の上付き数字の 4 は、高下降調 (high falling tone) の声調記号を示す) (Enfield 論文 (第 3 章)、78 頁)。日本語や韓国語では、ソ系や「コ」(ku) の使用が可能である (Wilkins 論文 (第 2 章)、68 頁も参照)。

指示詞の選択や使用において、どのようなタイプの「聞き手の注意」の機能が (どの程度) 関与するかには言語差があり得ることになる (この点に関しては、Levinson 論文 (第 1 章、29-30 頁) の総括的な議論も参照)。

### 3. 「Here スペース」の伸縮性と形成要因：ラオ語の指示詞を例に

Enfield (2003) は、ビデオ映像を用いた自然談話の分析を基に、ラオ語の指示詞 (指示限定詞) の分析を行った論考である。従来、ラオ語の指示詞 nii<sup>4</sup>、nan<sup>4</sup> は、それぞれ、「近称」、「遠称」の指示形式と記述されてきたが、Enfield (2003) は、nii<sup>4</sup> が遠くにある対象も指示可能である点を指摘している。一例を挙げてみよう。用水路の向こう岸の道を二頭の水牛が引かれているのを見たラオ族の村人の一人が、一頭が身ごもっていると言った。Enfield は、身ごもっているのはどちらの水牛かと近くの女性に聞いたところ、その女性は前を歩く方の水牛を指さした。女性から水牛までの距離は少なくとも 25 メートルは離れていたが、女性は nii<sup>4</sup> を使って指さしたのである (図 3 参照。図 3 (b) 内の REF は指示対象 (referent) を示す)。

このような映像付きの自然談話の観察から、Enfield (2003) は、従来「近称」の指示形式とされてきた nii<sup>4</sup> は、「直示的プリミティブ」(deictic primitive) としての「指し示す」 (=DEM) という意味のみを語彙の意味として持っており、一方、「遠称」とされてきた nan<sup>4</sup> は、「HERE スペースにない対象を指し示す」 (=DEM + NOT HERE) という語彙の意味を持っているとした (「HERE スペース」とは、話し手を中心に形成される伸縮可能な空間を指す)。本書のエリシテーション調査によっても、図 4 が示すように、ラオ語の nii<sup>4</sup> が遠くの対象まで指示し得る実態が浮き彫りとなっている (Enfield 論文 (第 3 章))。





(a) (‘Which one’s pregnant?’) ‘Nii<sup>4</sup> one.’ (b) (a) の‘Nii<sup>4</sup> one.’の発話の指示対象

図3 遠くの指示対象を指す nii<sup>4</sup> の一場面 (Enfield 2003: 104-105)

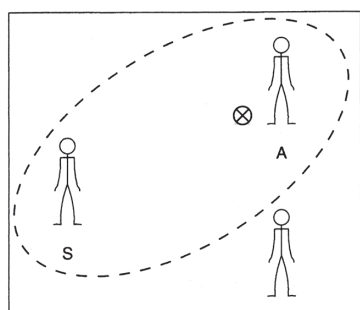
| 1. nii <sup>4</sup> only | 2. nii <sup>4</sup> preferred, nan <sup>4</sup> possible | 3. nii <sup>4</sup> / nan <sup>4</sup> equally likely | 4. nan <sup>4</sup> preferred, nii <sup>4</sup> possible | 5. nan <sup>4</sup> strongly preferred (nii <sup>4</sup> extremely marginal) |
|--------------------------|----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------|
| <br>(1)                  | <br>(2)                                                  | <br>(9)                                               | <br>(10)                                                 | <br>(15)                                                                     |
| <br>(3)                  | <br>(4)                                                  | <br>(12)                                              | <br>(13)                                                 | <br>(18)                                                                     |
| <br>(6)                  | <br>(5)                                                  | <br>(14)                                              | <br>(16)                                                 | <br>(25)                                                                     |
| <br>(7)                  | <br>(8)                                                  | <br>(20)                                              | <br>(21)                                                 |                                                                              |
| <br>(11)                 | <br>(17)                                                 | <br>(19)                                              | <br>(24)                                                 |                                                                              |
|                          | <br>(22)                                                 | <br>(23)                                              |                                                          |                                                                              |

図4 ラオ語の指示詞 nii<sup>4</sup> と nan<sup>4</sup> の分布 (Enfield 論文 (第3章)、78頁)<sup>3</sup>

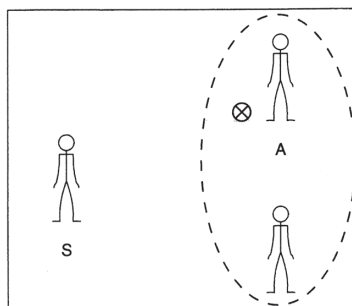
先に見たように、Enfield は、nii<sup>4</sup> には「指し示す」(= DEM) という意味を、nan<sup>4</sup> には「HERE スペースにない対象を指し示す」(= DEM + NOT HERE) という意味を与え

<sup>3</sup> 実際には、【場面 15】、【場面 18】、【場面 25】のように、nan<sup>4</sup> の使用が強く好まれ、nii<sup>4</sup> の使用が極めてマージナルとなるケースもあるが(図4 参照)、Enfield は、これらの場面では、指示対象が話し手からは見えず、「HERE スペースにない」と認識されやすいのだという。すなわち、ここでは、nii<sup>4</sup> は、意味論的に使用が排除されているのではなく、語用論的な要因(ここでは、対象物が見えないという視覚的な要因)によってその使用が許容されにくくなっているというわけである(Enfield 論文 (第3章)、84頁)。

ているのであるが、*nii*<sup>4</sup>は、語用論的に「HERE スペースにある対象を指し示す」(= DEM + HERE) ことを推意する(ここには、後述する「尺度推意」(scalar implicature)が関わっているとされる)。Here スペースは、個々の発話状況によってその範囲(広さ)が変化し得るものであるが、Enfield は、Here スペースの範囲は、(i) (接近を妨げるような) 物理的な障害物、(ii) 物理的な仕切(部屋など)、(iii) 相互行為空間(ないしは、参加領域)などに影響を受ける形で形成されるとされる(Enfield 論文(第3章)、80-83 頁参照)。たとえば、Here スペースの範囲が相互行為空間(参加領域)によって形成される例を見てみよう(点線で囲われた枠は相互行為空間(参加領域)を表す)。



(a) Addressee engaged in interaction (a ball game) with speaker, focused on referent (a ball): *nii*<sup>4</sup> preferred.



(b) Addressee engaged in interaction (a ball game) focused on referent, speaker not involved: *nan*<sup>4</sup> preferred.

図 5 相互行為空間(参加領域)(Enfield 論文(第3章)、82 頁)

Enfield によれば、図 5 の (a) と (b) の状況では、話し手、聞き手、第三者、指示対象(ボール)が存在しており、客観的な状況は変わらないが、(a) の状況では *nii*<sup>4</sup> が、(b) の状況では *nan*<sup>4</sup> が選好されるという。(a) の状況では、話し手と聞き手がボール遊びをしていることから、話し手と聞き手の相互行為(参加領域)の空間が Here スペースとなり、指示対象は、その Here スペース内にあるため、*nii*<sup>4</sup> による指示が選好される。一方、(b) の状況では、ボール遊びをしているのは、聞き手と第三者であり、聞き手と第三者の相互行為(参加領域)には、話し手は含まれていない。そのため、聞き手と第三者の相互行為(参加領域)は Here スペースとはなり得ず、指示対象は、Here スペースの外にあると認識されるため、*nan*<sup>4</sup> による指示が選好されるという。

「Here スペース」の概念は、ラオ語以外の言語の指示詞の選択や使用を分析する上でも有効な概念であると言える。たとえば、以下の日本語の例を見てみよう。

- (5) (話し手と聞き手は、7、8 メートルほど離れた距離で、サッカーボールを蹴り合っている。サッカーボールが聞き手の足元に転がったのを見て、話し手が聞き手に話しかける)

{この／??その} ボール、新しくて蹴りやすいね。

- (6) (話し手は、通りすがりに、友人達(聞き手と第三者)がサッカーボールを蹴り合っているのを見かけ、友人達に話しかける)  
 {??この／その} ボール、新しく蹴りやすそうだね。

(5) では、話し手と聞き手の相互行為の空間(サッカーボールを蹴り合う空間)が Here スペースとして形成され、その Here スペースの中に指示対象であるサッカーボールが含まれていると解釈されるため(図 5(a) の状況参照)、コ系の使用が自然となっている(ここでは、サッカーボールは、位置的には話し手よりも聞き手に近いものの、ソ系よりもコ系による指示のほうが自然となる点が興味深い)。一方、(6) では、聞き手と第三者の相互行為の空間(サッカーボールを蹴り合う空間)には話し手は参加しておらず、その空間は Here スペースとはなっていない(図 5(b) の状況参照)。この場合、コ系よりもソ系による指示のほうが自然である。<sup>4</sup>

#### 4. 「中立」(「無標」)の指示形式

Levinson は、「本書の主要な発見の 1 つ」として、距離を符号化しない「中立」(neutral)、ないしは、意味的に「無標」(unmarked)の指示形式の存在の指摘を挙げている(Levinson 論文(第 1 章)、23 頁)。ある指示形式が幅広い距離空間で使われている場合、その指示形式は「中立」(「無標」)の指示形式である(可能性が高い)とみなされる(Levinson 論文(第 1 章)、21 頁)。Levinson によれば、本書の調査対象となっている 15 の言語のうち実に半数近くの言語において、この「中立」(「無標」)の指示形式が確認されている。一例として、イエリ・ダニエ語(Yéli Dnye)を見てみよう。表 1 はイエリ・ダニエ語の指示詞の体系である。<sup>5</sup>

<sup>4</sup> 次の例では、(5) と異なり、コ系による指示は不自然となる。

(i) (話し手と聞き手は、7、8 メートルほど離れた距離で、サッカーボールを蹴り合っている。聞き手がサッカーボールをしばらく足元に止めているのを見て、話し手が聞き手に話しかける)

{\*この／その} ボール、早くこっちに蹴ってよ。

ここでは、話し手と聞き手の間で領域(視点)の対立が生じてしまっており(「こっちに」という語の使用も参照)、Here スペースは話し手のみを含む(聞き手や指示対象のボールを含まない)狭い範囲となっている。すなわち、この例では、指示対象のボールは Here スペースの外にあると認識されているため、コ系による指示が不自然となっている。

<sup>5</sup> イエリ・ダニエ語には、さらに、wu という「不確かな認識的条件」(uncertain epistemic conditions)の下で使用される特殊な指示形式があるが、表 1 には wu は含まれていない。

|                  | Speaker-based             | Addressee-based                        |
|------------------|---------------------------|----------------------------------------|
| Proximal         | <i>ala</i>                | <i>ye</i>                              |
| Medial (neutral) | <i>kî</i>                 | —                                      |
| Distal           | <i>mu</i> (far from Spkr) | (potentially equivalent to <i>ye</i> ) |

表 1 イェリ・ダニエ語の指示詞の体系 (Levinson 論文 (第 15 章)、322 頁)

イェリ・ダニエ語の指示詞の体系でまず注目されるのが、「聞き手基準的近称」(addressee-based proximal) (= 聞き手領域指示) と「話し手基準的中称」(speaker-based medial) (= 中距離指示) に対して、それぞれ *ye* と *kî* という異なる指示形式が割り当てられている点である。日本語では聞き手領域指示と中距離指示はソ系という同一の指示形式が担うが、このイェリ・ダニエ語の指示詞の体系は、類型論的に見た場合、「聞き手領域指示」と「中距離指示」が同一の指示形式で実現する必然性は必ずしもないことを示唆する。ソ系の「聞き手領域指示」と「中距離指示」の多義性に対する統一的説明は、日本語指示詞研究におけるボトルネックの 1 つとなってきたが、その背景には、「聞き手領域指示」と「中距離指示」の用法の概念的な繋がり、ないしは、両用法の概念的な共通性が自明ではないという点があったと思われる。

図 6 は、イェリ・ダニエ語の指示詞のエリシテーション調査の結果を示した図であり、図 7 は、その結果を基に、この言語の指示詞の空間分布を整理した図である。

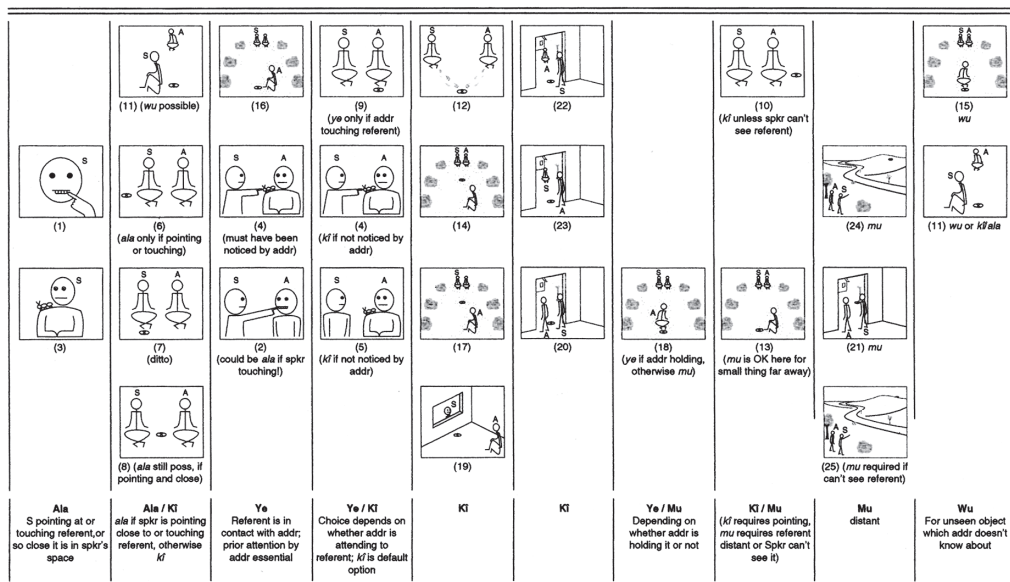


図 6 イェリ・ダニエ語の指示詞のエリシテーション調査の結果  
(Levinson 論文 (第 15 章)、326 頁)

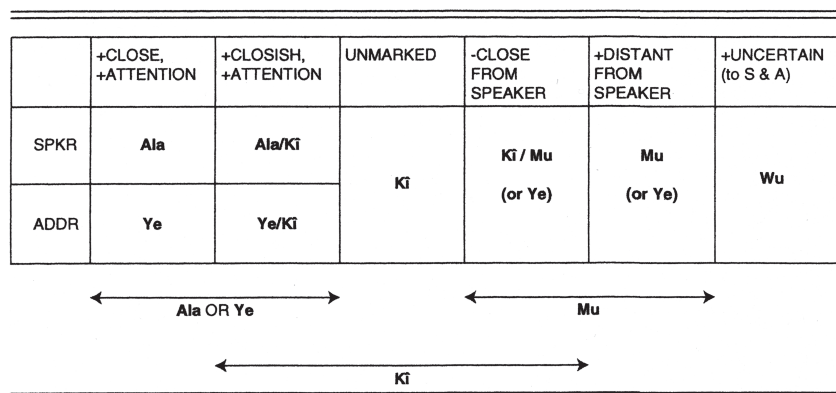


図7 イェリ・ダニエ語の指示詞の空間分布 (Levinson 論文 (第 15 章)、327 頁)

以下、話し手基準 (speaker-based) の系列の指示形式 (ala/kî/mu) (表 1 参照) を中心に見てみよう。Levinson によれば、kî は、実際には、中距離的な距離指定を受ける「中称」(medial) ではなく、図 8 に示すように、距離指定を受けない「中立」(「無標」) の指示形式であるという (Levinson (第 15 章)、328 頁)。

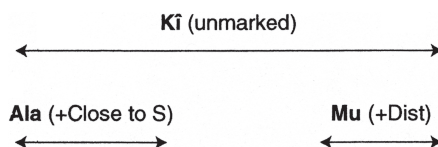


図8 イェリ・ダニエ語の話し手基準の指示形式の系列における無標と有標の対立 (Levinson 論文 (第 15 章)、328 頁)

実際の使用場面においては、kî は、指示対象が話し手の近傍にある場合や、話し手から遠くにある場合には現れにくい (図 6、図 7 参照)、これは、距離指定を含む ala [話し手-近] と mu [話し手-遠] といった「有標」の指示形式による「語用論的優先 (語用論的先取り)」(pragmatic pre-emption) (Levinson 2004: 109) によるとする。「語用論的優先」とは、Grice (1975) の「量の公理」の 1 つ目である「あなたの貢献を、当のやりとりのその場の目的のために必要なだけの情報を与えるようなものにせよ」に従う現象であり、今回の指示詞のケースで言えば、距離指定を含む (それゆえ情報量の多い) 「有標」の指示形式が、距離指定を含まない (それゆえ情報量の少ない) 「無標」の指示形式に優先して使用されることをいう (Levinson 論文 (第 15 章)、328 頁)。

一方で、距離指定を含まない (すなわち情報量の少ない) 「無標」(「中立」) の指示形式である kî が使用された場合、Grice の「量の公理」の 1 つ目 (ないしは、Horn の「Q 原理」) から導かれる「尺度推意」(scalar implicature) によって、「話し手から近くなく、かつ、話し手から遠くない」という推意が生じるとされる。尺度推意では、情報量の多い表



現 S(有標の表現)と情報量の少ない表現 W(無標の表現)が集合〈S、W〉を形成するとき、情報量の少ない表現 W が使われた場合には、情報量の多い表現 S が成り立たないことが推意されるからである (Levinson 論文 (第 1 章)、328 頁)。結果として、kí は、「中距離性」を語用論的に推意することになるというわけである。

Levinson は、次のように、他言語の指示詞研究で「中称」とされてきた指示形式も、イエリ・ダニエ語の kí と同様の観点から見直す余地がある点を述べている。

- (7) 本書の調査結果に拠るならば、「中称」の指示形式の報告、すなわち、3つの距離区分のシステムを疑ってかかる理由がある。これらの多くは、実際には、近称と遠称を明示的に符号化した2つの指示形式と、無標または相対的に無標の第三の指示形式から成り立っている可能性があるように思われる。

(Levinson 論文 (第 1 章)、24 頁)

この Levinson の指摘が示唆的であるのは、金水 (1999) が次のように指摘しているように、日本語のソ系の中称 (中距離性) も、プリミティブな意義素としては認め難いからである (さらに、金水・田窪 (1992: 169)、金水・岡崎・曹 (2002: 220) 参照)。

- (8) 次に中距離指示のソであるが、“中距離”という領域は近距離、遠距離が確定した後、に寄生的に成立する領域で、プリミティブとは言えない。また、中距離のソはやはり独り言では現れにくく、聞き手への教導、注意喚起等に多く用いられる。さらに中距離のソは、「そこ」「その辺」等の場所表現がほとんどを占めるのであるが、これは空間が本来、連続的・一体的で境界を持たないために、話し手の積極的な焦点化をまって初めて区分が成立する、ということと関連するようである。場所以外の要素は、(時間は別の問題があるので措くとして) 基本的に空間内に分離的・離散的に存在する。そのような対象はそれ自身が図として、地から区分されて存在しているので、それをまず近称や遠称、あるいは聞き手領域に配置させれば指示は事足りるので、あえて中距離という領域に当てはめる必要はないのである。以上の点を勘案すると、中距離のソも、聞き手領域指示のソと似て、コミュニケーション上の要請によって隙間を埋めるように適用された用法と見ることができるのである。 (金水 1999: 86-87)

ソ系の中称 (中距離性) は、コ系の近称とア系の遠称による語用論的優先の結果の意味として捉えることができる可能性もある (澤田 (2016: 65) 参照)。

さらに、Levinson は、「中立 (無標)」の指示形式は、3系列のみならず、2系列の指示体系の言語にも認められ得る点を指摘している (Levinson 論文 (第 1 章))。表 2 は、15 の言語における名詞類の指示詞 (nominal demonstratives) の指示形式の種類を意味別にリストしたものである (「1」は当該の意味を持った指示形式が存在することを示す)。こ



ここでは、「中立」の指示形式 (NEUTRAL term) を持つ言語として、イエリ・ダニエ語のほか、チュクチ語、ラヴカレヴェ語、ラオ語、ユカテク語、ワラオ語、ティドレ語が挙げられている (Levinson は、サリバ語、ツェルタル語、ダラボン語の指示形式の中にも、実際には、中立の指示形式として捉え直されるものがあり得る可能性を示唆している (Levinson 論文 (第 1 章、23 頁))。各言語の指示形式の空間分布を示したのが図 9 である (S = 話し手、A = 聞き手、Prox = 近称、Dist = 遠称、Far = より遠称、N = 中立 (無標))。

|            | Speaker-anchored PROX | Speaker-anchored DIST | Speaker-anchored FAR DIST | Addressee-anchored PROX | Addressee-anchored DIST | Speaker + Addressee-anchored PROX | Speaker + Addressee-anchored DIST | NEUTRAL term | Terms on other dimensions  |
|------------|-----------------------|-----------------------|---------------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|--------------|----------------------------|
| Yélf Dnye  | 1                     | 1                     |                           | 1                       |                         |                                   |                                   | 1            | epistemic                  |
| Chukchi    | 1                     | 1                     | 1                         |                         |                         |                                   |                                   | 1            | attention                  |
| Lavukaleve | 1                     | 1                     |                           |                         |                         |                                   |                                   | 1            |                            |
| Saliba     | 1                     |                       |                           | 1                       |                         |                                   | 1                                 |              |                            |
| Lao        |                       | 1                     |                           |                         |                         |                                   |                                   | 1            |                            |
| Yucatec    | 1                     |                       |                           |                         |                         |                                   |                                   | 1            | attention                  |
| Tiriyó     | 1                     | 1                     | 1                         |                         |                         |                                   |                                   |              | new/old, auditory          |
| Trumai     | 1                     |                       |                           | 1                       |                         |                                   | 1                                 |              |                            |
| Tzeltal    | 1                     |                       | 1                         |                         |                         |                                   |                                   |              |                            |
| Portuguese |                       |                       |                           |                         |                         | 1                                 | 1                                 |              |                            |
| Warao      | 1                     | 1                     | 1                         |                         |                         |                                   |                                   | 1            |                            |
| Goemai     |                       |                       |                           |                         |                         | 1                                 | 1                                 |              |                            |
| Tidore     | 1                     |                       | 1                         |                         |                         |                                   |                                   | 1            | geocentric                 |
| Jahai      | 1                     | 1                     |                           | 1                       | 1                       |                                   |                                   |              | geocentric                 |
| Dalabon    | 1                     | 1                     |                           |                         |                         |                                   |                                   |              | identifiable vs unfamiliar |

表 2 各言語で認められる名詞類の指示形式の種類 (Levinson 論文 (第 1 章)、23 頁)

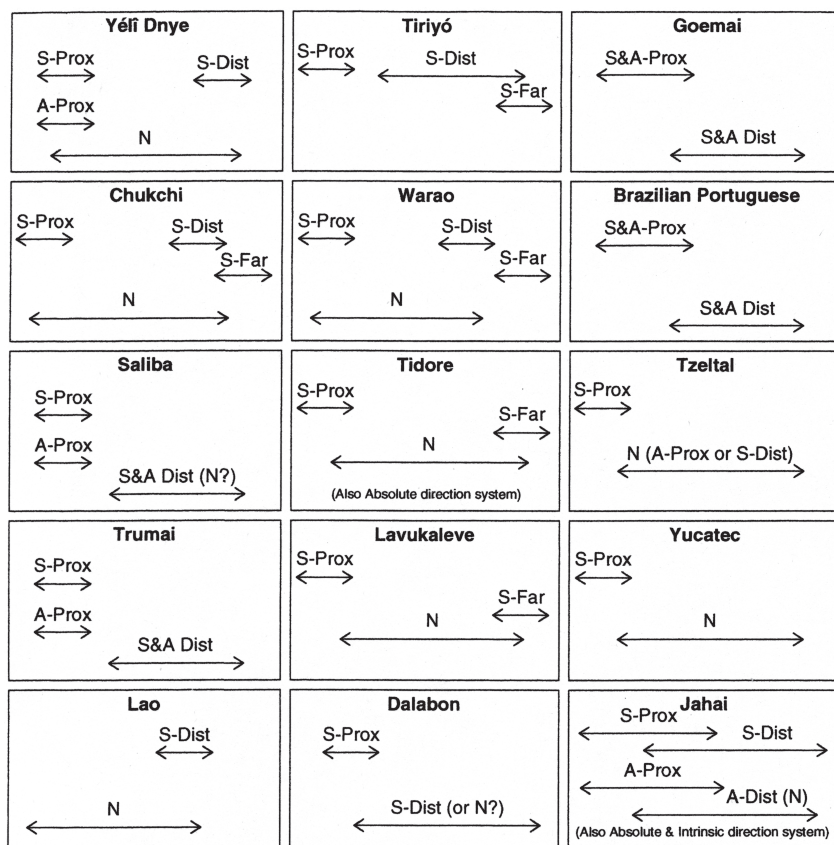


図 9 各言語の指示形式の分布関係 (Levinson 論文 (第 1 章)、26 頁)

これら 15 の言語の中では、ゲマイ語、ブラジル・ポルトガル語、ツェルタル語、ユカテク語、ラオ語、ダラボン語が 2 項の距離体系の指示詞を持つ言語とされる。<sup>6</sup> ここで、図 9 を基に、これらの言語の指示形式の対立を大まかに次の 3 つに大別してみよう (ダラボン語は、「近称／中立の対立」の可能性もあるため、(ii) にも入れている)。

(9) 2 項の指示形式の意味的対立のタイプ：

- (i) 近称／遠称の対立：ゲマイ語、ブラジル・ポルトガル語、ダラボン語
- (ii) 近称／中立の対立：ユカテク語、ツェルタル語 (、ダラボン語)
- (iii) 中立／遠称の対立：ラオ語

<sup>6</sup> ラオ語の指示詞  $nii^4/nan^4$  を「N/S-Dist」の対立とみなす図 9 における Levinson の整理は、 $nii^4/nan^4$  を「DEM/DEM+NOT HERE」の対立とみなす Enfield の整理とは厳密には異なる。すなわち、ラオ語指示詞  $nii^4/nan^4$  の意味論の整理において、Levinson は「距離」の概念を使用しているのに対して、Enfield は「距離」の概念を使用していない。

Levinson 論文（第 1 章、20-21 頁）では、さらに、これらの言語以外にも、図 10 に示すような 2 項体系をなす幾つかのヨーロッパの言語の指示詞にも言及している（点線箇所は、当該の指示形式の使用は選好されないものの、使用可能である範囲を示す）。Levinson は、図 10 の空間分布を基に、英語の *this/that* や、オランダ語の *deze (dit) / die (dat)* は「近称／中立の対立」、イタリア語の *questo/quello* は「近称／遠称の対立」、ロシア語の *этот/tot* は「中立／遠称の対立」をなす可能性を示唆している。

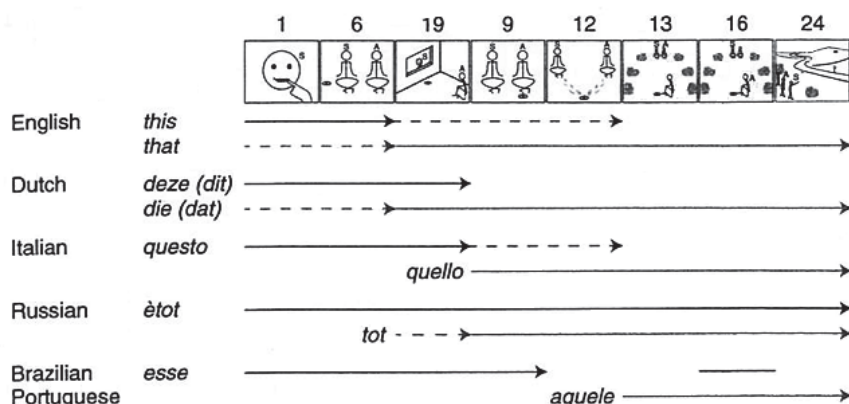


図 10 幾つかのヨーロッパ言語の指示詞の空間分布 (Levinson 論文 (第 1 章)、21 頁)

たとえば、英語の指示詞を取り上げてみよう。Levinson (2000: 94)、及び、本書 Levinson 論文 (第 1 章、21 頁) では、*that* が *this* より広い分布をなし、潜在的に *this* の分布領域と重なる（具体的には、*that* が話し手の近くの対象を指示することができる）事実を基に、*that* を「無標」（「中立」）の指示形式、*this* を「有標」の近称指示形式とみなしている。従来 *that* が有するとされてきた遠称的意味は尺度的推意により生じる語用論的意味に過ぎず、*that* は距離指定を含まない「中立」の指示形式であるというわけである。このように、（潜在的に）広い空間領域をカバーし得る場合、その指示形式は「中立」（「無標」）の指示形式とみなすという判断基準が採られていることがわかる (Levinson 論文 (第 1 章、21 頁) 参照)。

しかし、私見では、この基準のみからでは、当該の指示形式が「中立」（「無標」）の指示形式かどうかの判断は難しいと思われる。たとえば、英語では、*that* は話し手の近くの対象を指示することが可能であるが、この事実をもって直ちに *that* が「中立」の指示形式とみなせるかは議論の余地がある。たとえば以下の *that* の例を見てみよう。

(10) (返却されたテスト用紙を手にしなが、友人のマーシーに話しかける)

*That was a hard test, Marcie..*

(『A Peanuts Book Featuring SNOOPY ⑪』138 頁、角川書店) (澤田 2013: 7)

- (11) (カビの生えたケーキを手に持ち、鼻をつまみながら話す)

That's the cake we hid ages ago.

(『対訳よりぬきコボちゃん①』43 頁、講談社インターナショナル) (澤田 2013: 5)

(10) では、指示対象が行為を終えた後の対象 (時間的隔たりを有する対象) であるために *that* で指示されており、(11) では、指示対象が話し手の嫌悪感を示す対象 (すなわち、心理的な隔たりを有する対象) であるために *that* で指示されていると解釈することができる。ここでは、話し手の時間的・心理的な遠隔的距離意識が空間指示詞 *that* の使用に反映されている (澤田 2013)。私見では、英語の *this/that* は、「近称／中立の対立」とみなすより、「近称／遠称の対立」をみなしたほうが、*this/that* の多様な現象 (用法) に対してより自然な説明が可能となるように思われる。この場合、「近称／遠称」の指示形式の使用を決定づける意味論的・語用論的要因を抽出する作業が重要となる。

ここで、日本語のコ系とア系についても少し考えてみたい。一般に、日本語のコ系は近称、ア系は遠称とされる。一方で、コ系は、遠くの対象を指示し得る事実も知られている (Hoji et al. (2003)、加藤 (2004)、田窪 (2010)、平田 (2016)、澤田 (2018) など)。この現象は、コ系／ア系が「中立／遠称の対立」をなすと見るべきことを示す現象であろうか。<sup>7</sup>あるいは、あくまで「近称／遠称の対立」として説明できる現象であろうか。

たとえば、次の例を見てみよう (Hoji et al. 2003: 109、田窪 2010: 309)。

- (12) a. (他の様々な木に囲まれている 20 メートル先の高い木を指して)

{あの／??この} 木は樫の木です。

- b. (広い場所でポツンと立っている 20 メートル先の高い木を指して)

{あの／この} 木は樫の木です。 (Hoji et al. 2003: 109)

この例は、コ系が遠くの対象を指示できる事実を示しているが、ア系が a 文の状況でも b 文の状況でも自然であるのに対して、コ系は b 文の状況でのみ自然となるとされる。

「中立／遠称の対立」としてコ系／ア系を捉える見方に立てば、コ系は (ラオ語の *nii*<sup>4</sup> のように) 話し手から遠くの対象を指せるが、指示対象が聞き手に同定しにくい状況にあるなどの語用論的要因によって、コ系の使用が困難となる場合もあると説明されることになろう。この場合、コ系が自然となる (12b) の状況が特殊なのではなく、コ系が不自然となる (12a) の状況のほうが特殊であるとみなされよう。

一方、「近称／遠称の対立」としてコ系／ア系を捉える見方に立てば、コ系はあくまで話し手から近い対象を指すのが普通であって、指示対象が卓立しているなど、指示対象が

<sup>7</sup> 平田 (2016: 37) は、「空間的に柔軟性を持つコ系は、ラオ語指示詞の *nii*<sup>4</sup> と同様、「指し示す」機能である 'DEM' 概念のみをコード化する無標の指示形式である」とする。

「近い」と感じやすい語用論的状况が整っていれば、遠くの対象もコ系で指せると説明されることになろう (Hoji et al. (2003)、田窪 (2010) 参照)。この場合、コ系が不自然となる (12a) の状況が特殊なのではなく、コ系が自然となる (12b) のような状況のほうが特殊であるとみなされよう。

では、次のような例はどうであろうか (澤田 2018)。

- (13) (刑事達が遠く離れた場所から一軒の店を注視し、そこに犯人が現れるのを待っている。一人の刑事が隣にいるもう一人の刑事に向かって)

ホシは必ず {あそこ / ここ} に来るはずだ。

ここでも話し手から遠くの指示対象をコ系で指すことが可能である。この場合、話し手が遠くの指示対象 (店) に対して一定時間視覚的注意を向けることで、指示対象までの物理的な距離感が捨象され、コ系の使用が可能となっていると言えるが (澤田 2018)、ア系の場合、そのような認知的制約とは一切関係なく使用可能である。<sup>8</sup> また、ここでは、ア系が使用される場合、指さしを伴っても伴わなくてもよいが、コ系が使用される場合、指さしを伴わないのが普通である。すなわち、この例では、コ系に使用上の制約が課されており、コ系の使用に対して特別な説明が必要となる。<sup>9</sup>

興味深いことに、次の例のように、発話場所が「ここ」で示されている場合には、視覚的注意を向けている遠くの注目場所は「ここ」で指示しにくくなる (波線部の「ここ」は発話場所を、下線部の「あそこ／ここ」は遠くの注目場所を指すものとする)。この場合、遠くの注目場所が発話場所と対立的に捉えられることで、遠近感覚が生じ、「距離感の捨象 (喪失)」が難しくなるのだと考えられる (澤田 2018)。

- (14) (刑事達が遠く離れた場所から一軒の店を注視し、そこに犯人が現れるのを待っている。一人の刑事が隣にいるもう一人の刑事に向かって)

ホシはここではなく、必ず {あそこ / \*ここ} に来るはずだ。

詳細な検討は今後の課題であるが、現時点において評者は、コ系はあくまで近称の指示形式であって、種々の語用論的要因によって指示対象が「近い」と感じやすい状況が整っている場合に限り、遠くの対象もコ系で指せるという見方、すなわち、「近称／遠称の対立」としてコ系／ア系を捉える見方のほうがより説明力が高いのではないかと考えている。空間指示ではないが、「このごろ」、「このところ」などのコ系の時間指示がしばしば

<sup>8</sup> 木村 (1992: 195-197) は、中国語の近称「这 (zhè)」が遠くの対象を指示可能な事実を指摘し、そこでは、「被写体のズーム・イン」に似た効果が発揮される点を指摘している。

<sup>9</sup> なお、この例では、話し手が今いる場所 (発話場所) から遠く離れた場所が、直示移動動詞「来る」の着点となっている点も興味深い (澤田 2018)。



「発話時から近い時間」を指す現象も、「話し手から近い空間」を表す空間指示のコ系からの比喩的な拡張として説明できるなど、この見方を採ることで自然な説明が可能となるコ系の現象は多いと言える。

ここでは英語と日本語の指示詞についてやや踏み込んだ考察を行ったが、本稿では、「中立」の指示形式の存在（または、「近称／中立の対立」や「中立／遠称の対立」をなす指示体系の存在）を否定するものではない。評者が述べたかったことは、当該の指示形式が「中立」の指示形式かどうかを判断する際には、当該の指示形式が空間的に広くカバーしているかどうかという表層的な空間分布に基づく考察のみでは不十分であり、その空間分布の背後にある意味論的・語用論的要因の考察も必要となるという点である。

上の指摘はエリシテーション・ツールに基づく調査法上の制約という面も十分に理解した上でのものであるが、空間指示詞の研究においては、金水・田窪（1992: 191）による次の指摘も念頭に置いておくべき点であるように思われるのである。

- (12) 例えば現場の空間を各指示詞がどのように塗り分けるかという観察は、既に見てきたように、指示詞の基本的な機能とさまざまな要因が複合し、結果としてそのように見せかけているだけなのであって、それだけでは決して本質には到達できないのである。  
（金水・田窪 1992: 191）

## 5. おわりに

80年代頃から空間指示詞の体系や意味・機能の別による指示詞の類型論的研究が積み重ねられてきた (Fillmore (1982)、Anderson and Keenan (1985)、Diesel (1999, 2013)、Dixon (2003)、Imai (2009) など参照)。さらに、90年代頃からは、話し手と聞き手の相互行為やマルチモーダルに着目した空間指示詞の語用論的研究や会話分析的研究も見られるようになってきた (Özyürek (1998)、Burenhult (2003, 2008)、Enfield (2003)、加藤 (2004)、滝浦 (2008)、Hanks (2009)、林・安達・神庭 (2013)、澤田 (2013)、平田 (2014)、Sidnell and Enfield (2017) など参照)。本書は、基本的にはこれらの2つの潮流の合流域に位置づけられる研究であるが、さらに、エリシテーション・ツールとグライス語用論の概念装置（「語用論的優先」、「尺度推意」）を組み込んで、諸言語の空間指示詞の記述とそれらの知見を統合した空間指示詞の類型論的研究を試みている点に本書の特徴と新規性が認められる。

評者は、Enfield (2003) の論考に触れる中で、「指示詞の研究では、指示詞の選択に影響を与え得る語用論的・談話的要因を幅広く取り出す一方で、指示詞の語彙的意味の本質を探り、意味論と語用論の相互関係の中で指示詞の振る舞いを捉えることが重要となる」と述べたことがあるが（澤田 2016: 71）、本書でもその方向性が読み取れる。本プロジェ

クトで主導的役割を担っている S. C. Levinson、及び、本プロジェクトの中心メンバーである D. P. Wilkins と N. J. Enfield がグライス語用論の立場に立脚している点を考えれば、意味論と語用論を峻別し、意味論と語用論の相互関係の中で指示詞の振る舞いを捉える分析法は必然的と言える。

本書では、エリシテーション・ツールに基づき、各言語の空間指示詞の空間分布が示されているが、その空間分布の観察を通して、従来、「近称」「中称」「遠称」などと記述されてきた言語の指示形式の中には、距離指定を含まない「中立」ないしは「無標」の指示形式として捉え直されるべきものがあり、その「中立」ないしは「無標」の指示形式は、距離指定を含む「有標」の指示形式による「語用論的優先」や「尺度推意」により、会話的推意として距離の意味を表すものとされる。「中立」（「無標」）の指示形式の認定法の精緻化は課題として残るが、「中立」（「無標」）の指示形式の存在の指摘は、今後の指示詞研究に大きな影響を与えるものと言える。

さらに、元来、距離指定を含まない「中立」ないしは「無標」の指示形式であったものが、距離指定を含む「有標」の指示形式に変化したり、逆に、元来、距離指定を含む「有標」の指示形式であったものが、距離指定を含まない「中立」ないしは「無標」の指示形式に変化（漂白化）したりする意味変化は起こり得るのであろうか。あるいは、意味変化の中途段階にある指示形式の存在は認められ得るのであろうか。このような意味変化の観点からの考察も興味ある研究課題となり得るように思われる。<sup>10</sup>

このように、本書では、指示詞には距離指定を含まない「中立」の指示形式の存在が指摘されているが、このことによって、本書が「距離」に基づく空間指示詞の記述法や整理を否定しているわけではない点には留意する必要がある。実際、図9で見たように、Levinson 論文（第1章）では、「中立」の指示形式も含む「距離」の観点から各言語の指示形式の現れ方の一端が整理されている（むろん、「距離」以外のファクター（アンカー、視覚的注意、指さしなどのジェスチャー、可視性、可聴性など）が指示形式の選択に影響を及ぼす事実も指摘されている）。<sup>11</sup> 一方で、空間指示詞の選択には、純粋な「空間的距

<sup>10</sup> この点で、金水・田窪（1992）のソ系の中距離指示性をめぐる次の指摘は示唆に富む。

(i) 上のような説明は、ソ系列の中距離性はソ本来の意義ではなく、見せかけのものであると主張している。しかし、中距離のソが実際の使用を重ねる中で、ソ系に「中距離性」なるものが固着していく可能性までは否定しないでおく。たとえば「すぐそこ（にある）」のように副詞「すぐ」によって修飾可能であるという性質は「ここ／あそこ」にはないものであり、「すぐそば／近く」と並んで、やはり「ここ」ではないが遠くない、つまり中距離性を持っているということになる。（金水・田窪 1992: 188）（下線筆者）

<sup>11</sup> Enfield 論文（第3章）では、遠近の距離の概念を用いずに、ラオ語の指示詞の意味論の規定を試みているが、一方で、Enfield は、「これまで広く報告されてきているように、これらの要因（本稿筆者注：指示対象までの距離や聞き手の位置などを指す）が他言語においては指示詞に意味論的に符号化されていることを疑う理由はない」（87頁）とも述べている。

離」のみならず、知覚的・心理的・社会的・時間的なファクターを含んだ「非空間的距離」も関与し得る (Hoji et al. (2003)、加藤 (2004)、澤田 (2013)、Coventry et al. (2014)、Peeters and Özyürek (2016)、Rocca et al. (2019) など参照)。「距離」の概念が空間指示詞の記述における有効な概念の 1 つであることは疑いないが、「距離」の内実については、今後さらに深く掘り下げていく必要がある。

日本語の指示詞研究は、世界的に見てもかなり早い時期から研究が積み重ねられてきており、その水準も高いが、本書の知見は、日本語の指示詞研究にとっても有益な視点を含んでいるものと言える。この意味において、本書は、指示詞の類型論的研究のみならず、日本語の指示詞研究の更なる発展にも寄与し得る書であると言える。

### 参考文献

- Anderson, S. R. and E. L. Keenan. 1985. "Deixis." In T. Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description: Volume 3*, 259–308. Cambridge: Cambridge University Press.
- Burenhult, N. 2003. "Attention, Accessibility, and the Addressee: The Case of the Jahai Demonstrative *ton*." *Pragmatics* 13(3), 363–379.
- Burenhult, N. 2008. "Spatial Coordinate Systems in Demonstrative Meaning." *Linguistic Typology* 12, 99–142.
- Coventry, K. R., D. Griffiths and C. J. Hamilton. 2014. "Spatial Demonstratives and Perceptual Space: Describing and Remembering Object Location." *Cognitive Psychology* 69, 46–70.
- Diessel, H. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Diessel, H. 2006. "Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar." *Cognitive Linguistics* 17(4), 463–489.
- Diessel, H. 2013. "Distance Contrasts in Demonstratives." In Dryer, M. S. and M. Haspelmath (eds.) *The World Atlas of Language Structures Online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. (Available online at <http://wals.info/chapter/41>, Accessed on 2019-11-28.)
- Dixon, R. M. W. 2003. "Demonstratives: A Cross-linguistic Typology." *Studies in Language* 27(1), 61–112.
- Enfield, N. J. 2003. "Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis." *Language* 79(1), 82–117.
- Fillmore, C. J. 1982. "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis." In Jarvella, R. J. and W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, 31–59. Chichester: John Wiley and Sons Ltd.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Hanks, W. F. 2009. "Fieldwork on Deixis." *Journal of Pragmatics* 41, 10–24.
- 林徹・安達真弓・神庭真理子. 2013. 「レゴ組み立て課題を通して見る日本語の指示詞コトソ」

- 『東京大学言語学論集』34、275-289.
- 平田未季. 2014. 「注意概念を用いたソ系の直示用法と非直示用法の統一的分析」『言語研究』146、83-108.
- 平田未季. 2016. 「コ系の意味の再分析—指示詞体系における新たな最小の意味的対立—」『国立国語研究所論集』10、19-39.
- Hoji, H., S. Kinsui, Y. Takubo and A. Ueyama. 2003. “The Demonstratives in Modern Japanese.” In Li, Y. A. and A. Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Asian Languages*, 97-128. London: Routledge Curzon.
- Imai, S. 2009. *Spatial Deixis*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller.
- 加藤重広. 2004. 『日本語語用論のしくみ』東京：研究社.
- 木村英樹. 1992. 「中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対照を兼ねて—」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究（上）』、181-211. 東京：くろしお出版.
- 金水敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』、6(4)、67-91. 言語処理学会.
- 金水敏・田窪行則. 1992. 「日本語指示詞研究史から／へ」、金水敏・田窪行則（編）『指示詞』、151-192. 東京：ひつじ書房.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚. 2002. 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」、生越直樹（編）『対照言語学』、217-247. 東京：東京大学出版会.
- Kirsner, R. S. 1993. “From Meaning to Message in Two Theories: Cognitive and Saussurean View of the Modern Dutch Demonstratives.” In Geiger, R. A. and B. Rudzka-Ostn (eds.) *Conceptualization and Mental Processing in Language*, 81-114. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Küntay, A. C. and A. Özyürek. 2006. “Learning to Use Demonstratives in Conversation: What Do Language Specific Strategies in Turkish Reveal?” *Journal of Child language* 33, 303-320.
- Levinson, S. C. 2000. *Presumptive Meaning: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge: The MIT Press. (S. C. レヴィンソン（著）・田中廣明・五十嵐海理（訳）2007『意味の推定—新グライス学派の語用論—』東京：研究社.)
- Levinson, S. C. 2004. “Deixis.” In Horn, L. R. and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 97-121. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.
- Özyürek, A. O. 1998. “An Analysis of the Basic Meaning of Turkish Demonstratives in Face-to-Face Conversational Interaction.” In Santi, S., I. Guaitella, C. Cave and G. Konopczynski (eds.) *Oralité et gestualité: Communication multimodale, interaction : Actes du colloque ORAGE’98*, 609-614. Paris: L’Harmattan.
- Peeters, D. and A. Özyürek. 2016. “This and That Revisited: A Social and Multimodal Approach to Spatial Demonstratives.” *Frontiers in Psychology* 7 (222), 1-4.
- Rocca, R., M. Wallentin, C. Vesper and K. Tylén. 2019. “This is for You: Social Modulation of Proximal vs. Distal Space in Collaborative Interaction.” *Scientific Reports* 9(1), 14967.
- 澤田淳. 2013. 「視点、文脈と指標性—英語指示詞における聞き手への指標詞シフトの現象を

- 中心に一」、『語用論研究』15、1-23.
- 澤田淳. 2016. 「指示と照応の語用論」、加藤重広・滝浦真人（編著）『語用論研究法ガイドブック』、49-76、東京：ひつじ書房.
- 澤田淳. 2018. 「日本語の直示移動動詞の選択原理について——「行く／来る」の選択はどのようにして決まるのか？——」、『言語文化研究 久保進教授記念号』38(1-2)、237-290、松山大学総合研究所.
- Senft, G. 2014. *Understanding Pragmatics*. (Gunter Senft (著)・石崎雅人・野呂幾久子 (訳) 2017. 『語用論の基礎を理解する』東京：開拓社.)
- Sidnell, J. and N. J. Enfield. 2017. “Deixis and the Interactional Foundation of Reference.” In Huang, Y. (ed.) *The Oxford Handbook of Pragmatics*, 217-239. Oxford: Oxford University Press.
- 滝浦真人. 2008. 『ボライトネス入門』東京：研究社.
- 田窪行則. 2010. 『日本語の構造』東京：くろしお出版.
- Wilkins, D. 1999. “The 1999 Demonstrative Questionnaire: ‘This’ and ‘That’ in Comparative Perspective.” In Wilkins, D. (ed.) *Manual for the 1999 Field Season*, 1-24. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics.